【SHIP】

Social Hub Information Partners

SHIP（Social Hub for Information Partners）

SHIP は著名な社会人を招いて議論をするソーシャル・イノベーション・アカデミー、日経 GSR に参加する GSR 研究会、本学学生に大学に対する想いを強めてほしいという思いから活動している MGU TRY SPORTS Project の 3 本柱で活動している。

SIA（Social Innovation Academy）

Social Innovation とは直訳すると「社会革新」という意味になる。SIA では、社会の課題に取り組み、よりよい変化をもたらすための地道な活動をしている大人を招き、年に 3 回講演会やワークショップを開催している。目的は、学生の視野を広げ、新しい価値観の共有や素敵な大人と出会う機会を提供し、社会の様々な課題について考えるきっかけを作ることである。さらに、今年度からは SHIP メンバー内での勉強会であるミニ SIA も開催している。

【SIA vol.2『世界を通して見えた先にあったもの』】

2014 年 3 月 7 日、テーマは“痛み”。ゲストは、映画監督の小川光一氏、フォトジャーナリストの佐藤慧（さとう　けい）氏。

3 年前、東日本大震災で多くの尊い命が失われ、日本が悲しみで包まれた。そして 3 年たった今、その痛みを力に変えて逞しく生きてほしい。そんな想いから、津波の到達地点に桜を植え、後世に津波の悲劇を伝える小川監督最新作のドキュメンタリー映画『あの町に桜が咲けば』を上映した。佐藤氏には、貧困地域で力強く生きる子どもたちなどの写真をスライドで流し、写真にまつわるエピソードをご講演いただいた。

【SIA vol.3『世界の飢餓と私の食』】

2014 年 10 月 22 日、特定非営利法人ハンガー・フリー・ワールドの啓発活動担当、儘田（ままだ）由香氏をゲストとして招いた。テーマは、“飢餓”。そもそも飢餓とはなんなのか、から始まり、最終的に自分たちの食生活への想いやその見直しを参加者全員で議論するグループワークだ。飢餓と戦っている人がいるからこそ、裕福に生活できる我々がいる。このことを参加者全員が自覚することで、自分たちがこれから何をしていくべきか、考えを深めていくきっかけになった。

【SIA vol.4『現地から見たパレスチナ・イスラエル』】

2015 年 1 月 10 日、日本経済新聞社中東専門のジャーナリスト、中西俊裕編集委員をゲストに招き、常に大きなニュースとして世界に伝えられている“イスラエル・パレスチナ問題”をテーマに取り上げ

た。テレビで取り上げられる血なまぐさい戦闘の光景や悲嘆に暮れる人々というイメージが先行しがちだが、その陰にあるリアルな現地の姿について語っていただいた。現場を常に見つめてきた中西氏の説得力ある話しを聞き、イスラエル・パレスチナの本当の姿を知ることができた。そして表面的な情報に惑わされず、自分自身で考える力を培う必要があることを痛感した。

（学生メンバー　文学部フランス文学科 ）

GSR 学生アイデア・コンテスト参加

【3 年連続の入賞】

日本経済研究センターが主催する「学生アイデア・コンテスト」は今年で第５回を迎え、SHIP の GSR（Global Social Responsibility）研究会のメンバーが参加した。本コンテストは、世界が抱える貧困、教育、ジェンダー差別、環境破壊などさまざまな問題を企業の本業を通して解決すべく、持続的可能なビジネスプランを学生が提案するものである。参加企業は総合商社や製薬会社、IT 関連、プラント会社、航空会社、教育関係など多岐に渡る。このうち２社のリソースを組み合わせて、プランを作成し発表する。昨年は優秀賞、一昨年は最優秀を獲得しているので、今回もよい結果をだせるようにメンバー一丸となって臨んだ。

参加メンバーは１～４年の全ての学年から集まった。メンバーは学業のみならず､留学やインターンシップ、学外活動、サークルなど、さまざまな場面で活動しており、個性豊かなチームとなった。4 月にコンテストに向けて始動し、まずは、世界が抱える社会課題をいくつか取り上げてみた。途上国の抱える貧困や妊産婦の死亡率の問題、日本の少子高齢化問題、地球規模で大きな課題となっている環境破壊など、さまざまな国や地域に目を向け検討した。その結果、今もなお高い途上国における妊産婦の死亡率の問題に取り組むプランを提案することにした。この問題は国際的な課題としてミレニアム開発目標の解決すべきゴールにも指定されている。

具体的には､パナソニック､ファンケルの方にご協力をいただきながらプランを練り上げた。8 月には、実際に両企業に足を運び、具体的にアドバイスをいただいた。実現の可能性はあるのか、収益性は確保できるのか等、日々ビジネスに携わる方からの貴重なアドバイスをたくさんいただいた。学生の作ったプランに時間を割いてお話をしてくださる企業の方の熱意に感動したのを覚えている。

9 月に入り、プラン作成で徹夜する日も増えた。メンバー全員で駆け抜けた忙しい日々が今でも懐かしくなる。みんなが優勝に向けて全速力であった。コンテスト本番では力を出しきったが、結果は優秀賞であった。惜しくも、最優秀賞には手が届かなかったが、やりきった達成感と共に、今回のメンバーでコンテストに参加できたことが非常に嬉しかった。何かひとつのものを土台から作り上げることは難しく、壁に当たることばかりであったが、だからこそ得られる大きな達成感は今でも大きな糧になっている。改めて、このような機会をいただいたことに感謝したい。

（学生メンバー　法学部政治学科 ）

MGU TRY SPORTS Project

このプロジェクトは、初めてＡリーグに昇格したラグビー部と共同のプロジェクトを行うことによって、同じコミュニティにいる仲間が頑張っているという認識を与え、愛校心が芽生え、学生が“明学生”であることに自信を持ってほしいという理念のもとにスタートした。

【トラブルが続出してしまったが、何とか創り上げた横断幕】

当初、我々のイメージは「祝・体育会ラグビー部～」といった感じであったが、ラグビー部の学生やOB の方々の意見を参考にさせて頂き、「試合会場にも練習場にも持っていける横断幕」にしようということで作成を開始した。しかし、掲示物を作成・掲示する大学のルールを把握していなかったために、一時は掲示できるかも危ぶまれたが、大学事務局の関係部署の方々が尽力してくださり、なんとか無事に両校舎に掲示することができた。

【初めてのラグビーに興奮し、感動した秋の公式戦】

私自身、ラグビーのルールも知らなければ見たこともなかったので、練習試合や、公式戦を実際にこの目で見たときには非常に感動した。

我々 SHIP は秋の公式戦を全試合応援しに行くことを決め、横浜校舎に数か所設置されている TV モニターで一般の学生に対して、試合観戦を促す動画を流したり、立て看板や SNS を利用して公式戦の応援に参加するよう周知活動をおこなった。これらの PR 作戦がどれほどの観客を呼んだのか定かではないが、「明学ラグビーは強い」「明学ラグビーは頑張っている」といったイメージをつけるという意味では成功したと感じている。

【ラグビーを通して感じた「関係づくり」】

ラグビー部は全敗し、入れ替え戦にも負けてしまったため、Ｂグループへの降格が決まった。１年を通して応援していただけに非常に残念であるが、プロジェクトを通して、関係を築き上げることの難しさや重要さを改めて痛感した。ラグビー部の方々だけでなく、様々な関係者、関係機関の協力があってこそ今回もやり遂げることが出来たので、協力してくださった方々には感謝を申し上げたい。

練習試合時の横断幕掲示のようす

試合風景

（学生メンバー　社会学部社会学科）